

[4] ワンポイント解説 (現代文)

第1問	問1	<p>(ア)の「挙措」は、「立ち居振る舞い」という意味。前後の文脈から「挙動」と同じ字を使うと分かれば、選べる。(ウ)の「更地」の「更」は、訓読みなので意外に思い浮かばなかったかもしれないが、選択肢の漢字の熟語の訓読みが分かれば解答できたはず。その他の問題は、いずれも基本漢字。</p>
	問2	<p>傍線部直後の文が、傍線部の言い換えになっている点をまずつかむこと。「からだの動きが、『空間との関係で』、『他の人々との関係で』、ある形に整えられている」に注意すること。からだの動きを決定するのは、「空間との関係」と「他の人々との関係」の両方があることをつかむ。かつ、傍線部中の「そういうこと」の指示内容を追うこと。「そういうこと」とは、直前の「からだで憶えているふるまい」を指している。それを手がかりにすれば、その内容に触れている選択肢は、⑤しかない。②にも「さまざまな記憶を蓄積してきた身体」とあるが、「不自然な姿勢をたちまち正してしまう」「規律に完全に支配されている」が明らかにおかしいので、切れるはず。</p>
	問3	<p>傍線部の「先回りしてしまっ」ている空間が、遊園地であることをまずはつかむこと。「先回りしている」ということは、「特定の行為のための空間をつくる」ということを意味している。なぜそれがいけないのかを聞いている問題であり、それは「原っぱ」のもつ空間と人間の相互性を喪失してしまうからである。原っぱにおける空間のあり方に関しては、一つ前の段落に記述されている「たまたま居合わせた子どもたちの行為の糸が互いに絡まりあい、繕りあわされるなかで、空間の『中身』が形をもち始める」とある。この「たまたま」というのが、正解の選択肢④の「行為相互の偶発的な関係」の「偶発的」に対応している。「空間の予想外の使い方」というのは、「使用規則」や「行動基準」に縛られないことを意味している。その点に関しては、引用直後の段落に明確に記述されている。</p>
	問4	<p>傍線部中の「文化」の意味内容の把握が問われている。傍線部直前の「そのかぎり」が指している内容をきちんと追うこと。直前の青木の引用文の内容であり、「すでにそこにある物と人の関係」が、選択肢③の「身に付いたふるまいを残しつつ」に対応し、本文の「今度はその関係から新たな機能を探る」が、選択肢③の「他者との出会いに触発されて新たな暮らしを築く」に対応する。他の選択肢は論外。</p>
	問5	<p>「行為と行為をつなぐこの空間の密度」の内容を捉えればよい。「この」の指示内容を、傍線を含む段落及び前の段落から丁寧に追っていくこと。ひとつ前の段落の『暮らし』の空間……では、複数の異なる行為がいわば同時並行でおこなわれることにある。」と「暮らしのいろいろな象面がたがいに被さりあっている。」が同義であることをつかみ、「これが住宅という空間を濃くしている。」が、傍線部の「空間の密度」を意味していることを把握すること。同時に、空間の密度はかつての木造家屋には存在していたもので、傍線直後の「いろんなことがそこでできるという、空間のその可塑性によって、からだを眠らせないという知恵」という部分も、傍線部の「空間の密度」と対応した表現である。その内容に触れている選択肢は、①以外にはない。選択肢①の「他者との関係を作り出したりする可能性が低下してしまっている」については、かつての木造家屋については、問2で見たように、他の人々との関係がそこにあったことは明らかである。傍線部を含む段落の冒頭の「住宅は、いつのまにか目的によって仕切られてしまった」という点も、選択肢をチェックするポイントである。</p>
	問6	<p>(i) 波線部×「中身」の内容は、その後ろで詳しく掘り下げて説明される形となっている。選択肢①は「新たな仮説を立てよう」②は「これまでの論を修正する」③は「行き詰まった議論を打開する」が、全て波線部×以降で説明されている内容と合わない。 (ii) 選択肢①と④は、筆者は青木の建築論に沿って説明しているのであって、「異を唱え」ていないし、「批判的に検証」もしていないのでおかしい。選択肢②は、筆者は青木の建築論そのものを用いているので、「背景にある考え方を例に用いて」がおかしい。また、「目的・用途」に切り分けられているので、「それぞれの作業ごとに切り分けられ」もおかしい。正解の選択肢③の「空間の編みなおしという知見」は、問5の解説で触れた「いろんなことがそこでできるという空間のその可塑性によって、からだを眠らせないという知恵」と対応する。</p>

第2問	問1	例年通り、辞書的な意味がそのまま問われている。
	問2	「心情はどのようなものか」と聞かれているが、直接的に心情は書かれていないので、本文の事実描写から判断すること。選択肢の形は全て、前半に梶氏をどういう人物と思ったかが述べられている。まず傍線部の直前に「壮健そうな働き盛りである」と書かれており、傍線部はそこから導かれた表現である。また、9～10行目の「訪問先が、まれにみる陋屋であることにびくともした様子はない。お治婆さんはちょっと感心した。」とあるところにも注意する。この二点を踏まえている選択肢は④しかない。②では「初めて見るであろう陋屋にも全く物怖じする様子を見せない」とある点はポイントに触れられているが、傍線部が直接受けている「壮健そうな」に一切触れていない点で不可である。選択肢の後半の判別に関しては、本文を追っていかなければ明確には判別できないが、話を追っていけば、お治婆さんが立ち退きを拒絶していることは分かるので、④の後半の記述は問題ない。傍線部の「教育」とは、市役所の言う通りには立ち退きをしなないことを、梶氏に分からせるということの意味している。
	問3	梶氏の「顔色が変わった」のは、傍線部直前のお治婆さんの台詞が原因であることは明らかである。その台詞の内容は、「工場からドクが出ています。貝を採らないでください」と立て札を立てることであり、それに対して困っているのである。その内容について触れているのは、①と②しかないが、②では「工場から出る煙や水の汚染は嚴重な検査をしているので実際は問題にならないという主張」は、傍線部の後に発話された言葉なので、順序が違う。
	問4	まず各選択肢の前半が、傍線部の文字通りの意味を説明しているが、そこだけで判別するのは難しいので、後半で決着させる。62行目で梶氏が「元木治さん」とフルネームで話しかけてから、お治婆さんは梶氏の話をもとに聞く態度ではなくなっている。69行目で「お治婆さんは相手の口もとをじっと見つめていながら、何の反応も表明しなかった」とあるのはつまり、お治婆さんは立ち退きの話に関しては、まともに対応するつもりはないということである。更に、傍線部の「楽シイオ話」の中身は、実際には梶氏の切り出した立ち退きの話であるから、それを「楽シイオ話」と表現するのは明らかな皮肉である。以上から、④「市役所の担当者に対する皮肉」「梶氏をやり過ぎそうとする」が、この場面の説明として最も適切であることが分かる。最後の「賢さ」というのは、担当者との交渉のテーブルに真正面からつかないということが、実は交渉を進めさせないことになるという点を指して言っているのである。
	問5	「どのような意味を持っているか」とあるが、84行目以降の情景描写に注意する。「空気が枯れ草のように黄ばみ始めた」「七本の煙突は…錆釘色になって凍りついた」など、明らかに暗い印象を与える描写が続いており、かつ91行目からの段落の中で、「岩陰かに、鮎虫に中身を食い荒らされた甲羅が散乱している。焼場で拾いあげたお骨と同じように軽々としている。」とあり、この部分は明らかに「死」の話に結びついている。「死」との結びつきに言及している選択肢は、③と⑤だけである。更に、100行目からの最終段落を見ると、猫も明らかに普通ではない様子になって、最後には「お治婆さんの視野がしだいに狭くなり、中心に細い光のリボンが残った」とあり、これは汚染物質による身体の変調を示唆している。③では「人間の営みとはかかわりなく生き物達が淘汰されていくという過酷な自然のありようが具体的に描かれている」とあり、これはこの最後の描写と全く合わない。
	問6	①は「立派な体格をしたヒーロー的な存在である」が、②は「擬人法」が、④は「梶氏が責めを負わせられる側であり、お治婆さんが責める側である」が、⑥は「壮厳でありながら耽美的な雰囲気」が、明らかに本文内容と合わない。

[4] ワンポイント解説 (古典)

<p>第3問</p>	<p>問1</p>	<p>(ア)「すかす」には「だます」「なだめる」の意味があるが、選択肢には②の「なだめる」しかない。敬語の補助動詞「まゐらす」が訳出されているのは、②・④のみであることから、②が正解となる。</p> <p>(イ)「奉る」の謙讓語の敬意の対象は「為義」であり、「為義」の「何か」を「失ふ(=奪う)」と考え、直前の鎌田の心中文「討ち奉らん」より、「為義の命を奪う」こととわかる。また、「すでに」には、「もう・とっくに」「いよいよ」の意味がある。</p> <p>(ウ)「知る」とは「理解する・わかる」の意味になるので、⑤が正解となる。「せ給ひ」は二重尊敬なので、「せ」を使役に訳さないこと。</p>
	<p>問2</p>	<p>a 「れ」の識別 「無慙のことかな。ただ今斬られ給はんことをも知り給はず」とあり、「れ」は内容から「受身」と判断できる。直後に「給ふ」があるので「尊敬」ではない。「斬る」は「自発」行為ではない。直後に打消がないので「可能」にならない。</p> <p>b 「ね」の識別 「知ら(=四段活用・未然形)」に接続した「ね」は打消の助動詞。</p> <p>c 「せ」の識別 「力者どもに」とあり「使役」となる。</p> <p>d 「せ」の識別 「ましませ」は動詞「まします(=いらっしゃる)」の語尾。</p>
	<p>問3</p>	<p>4行目・義朝の「…御首を刎ねてまゐらせよと、度々仰せ下され候ふのあひだ、…御命ばかりをこそ申し助けまゐらせて候へ。…いかなる讒言や出で来候はんずらん。東山なる所に、…しづかに御念仏候へかし」に対して、父は「手を合わはせ喜び給ふ」、傍線部Aの直前の義朝の『「ただ今斬られ給はんことをも知り給はず、かくのたまふよ」と思ひければ』の心中文から、④が正解となる。</p>
	<p>問4</p>	<p>傍線部Bの直前の鎌田正清の発言内容が問われている。決め手は、発言の最後「最後の御念仏をも勧め奉り給へかし」から、「落ち着いて最後の念仏が唱えられるように」とある③が正解となる。</p>
	<p>問5</p>	<p>「心情」は「発言」に現れる。傍線部Cを含む為義の発言では、28行目「討ち死にして失せたらば、名を後代にあげてまし」と後悔し、傍線部Cの直前の「ただし」を受けて、傍線部Cの直後では「上梵天…義朝が逆罪を助けさせ給へや」と義朝が不幸にならないように祈っている。このことから⑤が正解となる。</p>
	<p>問6</p>	<p>「表現の特徴」が問われているが、選択肢の「表現の特徴」が判断しにくく、混乱した受験生が多いと思われる。しかし「内容の説明」に注目すると、選択肢を消去ことができる。①「義朝や鎌田正清への非難の気持ち」、③「勇ましくあろうとする武士の価値観」、④「最後まで譲り合えない二人の姿」、⑤「為義の心情が地の文で詳しく説明される」が本文にはっきりとは書かれていない。</p>

第4問	問1	<p>(1)「偏」には「かたよる」の意味がある。</p> <p>(2)「所以」には「原因・理由」と「方法」の2意がある。「理由」と⑤「目的」が紛らわしいが、「所以自強」の「自強」は「学問」への態度を示しているので、④「方法」の方が適切である。</p>
	問2	<p>傍線部Aの「不能」は「～できない」、「不及」は「～不十分である」、「如」は「～のようだ」の意味になる。また「進修」の「修」は「学問を修める」の意味であるから、「学ぼうとしている」としている②が正解である。</p>
	問3	<p>(i) 読点の直前の「也」は「～や」と読む。「なり」は文末での読み方になる。)さらに、傍線部の直前の「好古、敏以求之者」と矛盾しない内容にするためには、「曷」を「反語」に訳さなくてはならないため、文末は「～んや」と読む。なお、⑤は「貴ばれざらんや」と「受身」に読んでいたので不適切である。</p> <p>(ii) (i)の判断基準から「反語」に訳しているものを選ぶと①～③のいずれかになる。置き字「於」を、①は「貴ばれなかった」と「受身」に、②は「～よりも」と「比較」に訳しているため、不適切である。</p>
	問4	<p>傍線部Cは反語の構文であり、「真に敏(＝自ら進んで学ぶ)者である」の意味となる。傍線部Cの直前の「二子皆自謂不敏。其遜抑可見矣。回之仁・参之孝、三千之徒、未能或之先焉(＝二人は自ら『敏』ではないと言う。そのことは『遜』と判断することができる。回の仁・参の孝も、三千の弟子は、いまだこの二人よりも先んずることができない。)」から、①が正解となる。</p>
	問5	<p>Ⅰは「美德」から「遜」、Ⅱは「雖」からⅠの「遜」と対比される内容で「敏」が入る。これで④・⑤に絞り、Ⅲは第2段落の顔回と曾参の話から、「所重尤(＝もっとも重要視するもの)」として「敏」が入る。</p>
	問6	<p>(i) 選択肢の微妙な言葉遣いにとまどった受験生もいたと思われる。</p> <p>第1段落の各選択肢の説明は、③の「筆者の見解」がやや引っかかるが大差がなく、選択肢決定の決め手に欠ける。第2段落の説明は、③「儒家思想家一般の見解」、⑤「思想史上の対立点の明示」が不適切である。残りの選択肢を吟味してみると、第3段落の説明は、②「社会的通念への批判」、④「筆者の時代における認識」が不適切である。従って、①が正解となる。</p> <p>このようなまぎらわしい設問は、選択肢同士を比較して検討する視点が重要である。</p> <p>(ii) 問5で正答を導いたように、本文では「敏」をもっとも重要視しており、それは④「みずから能動的に努力することが大切である」と表現されている。</p>